様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００４７０

研究課題名（和文）18世紀末―19世紀初頭のロシアの文芸作品における「ロシア」形象の研究

研究課題名（英文）Study of images of Russia in Russian literary works of the late 18th-early 19th century

研究代表者
鳥山　祐介（Toriyama, Yusuke）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：４０４６６６９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀後半のエカテリーナ二世の時代から対ナポレオン戦争の時代、さらに1830年代に至るまでのロシアの文芸における「ロシア」の形象を考察対象とし、18世紀にはヨーロッパ化の枠内で生み出されたロシア像が次第にヨーロッパとの差異を強調するようになるプロセスをある程度明らかにした。成果の一部は学会で報告されたが、コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻が影響して研究計画に変更を余儀なくされたため、その進行はやや遅れた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ロシア文化の研究が大きく19世紀以降に集中している中、近代ロシア文化の基礎が築かれた18世紀のロシア文化の研究はその空隙を埋める大きな意義を持つ。またロシア文芸の中の「ロシア」表象を主題とする本研究の成果は、現在にまで引き継がれるロシアの自己認識、ナショナル・アイデンティティの問題を考える上で踏まえておくべき重要な文脈についての知を提供するものとなる。ロシアをめぐる問題が世界的な重要課題となる中、その社会的意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have examined the image of Russia in Russian literature from the late 18th century to the 1830s. I have clarified the process by which the image of Russia created within the framework of Europeanization in the 18th century gradually came to emphasize its differences from Europe. Some of the results were reported at the conference, but the progress of the project was delayed because Covid-19 and the Russian invasion of Ukraine forced changes in the research plan.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア　18世紀　19世紀

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)
本研究の基礎にあるのは、文化的、地理的枠組みとしての「ロシア」が、さまざまな社会的、歴史的条件に基づいて創られた可変的なイメージであるという認識である。伝統的な理解によれば、現在あるような「ロシア」「ロシア人」に関する認識がロシアで産まれたのは対ナポレオン戦争期であり、それまでヨーロッパの上流社会の一員として育てられていたロシア人将校たちが農民出身の兵士たちと同じ部隊に属して戦った経験から、身分差を乗り越えたロシア人としての同胞意識が生まれたとされている（このような認識を示した例としてはＯ．ファイジズの著名な啓蒙書『ナターシャの踊り』（2002）がある）。

(2)
とはいえ、歴史学者Ｄ．リーヴェンが『ロシア対ナポレオン』（2009）で述べているように、この戦争は当時にあっても決して一様なとらえ方をされてきたわけではない。即ち、一方に「貴族と農民が力を合わせて戦った」とされたロシア国内の戦争、即ち 1812 年の「祖国戦争」の記憶を称える人々がおり、他方には皇帝アレクサンドル一世に代表されるように、王侯貴族がプロイセン等との同盟を通して勝ち取った勝利、皇帝率いるロシア軍の 1814 年のパリ入城の記憶を重視する人々がいた。上述の新しいロシア人意識と結びつくのは前者であり、これはレールモントフの詩「ボロジノ」（1837）、トルストイの小説『戦争と平和』（1863-65）といった媒体を通して徐々に一般的となったものである。確かに、多くの先行研究や研究代表者の過去の研究が示すように対ナポレオン戦争がロシアの知識人の世界認識にとって一つの転機となったことは疑いない。とはいえ、人々のロシア認識がこの時期にまるごと一新されたわけではなく、この段階では新旧のさまざまな認識が共存していたのも事実である。もとよりある時期の文化や思考様式の検討にあたっては先行する時代の文化的背景への理解が欠かせない。

(3)
本研究ではそうした点に鑑みて、ロシアにおいて文学活動が急激に活性化する 18 世紀末から 19 世紀初頭に至る時期の文芸作品の中でどのようなロシアのイメージが提示されてきたかを検討する。文学テクストは単に所与の現実を言語で写し取るだけではなく、想像力が生み出した「もう一つの現実」を提示するという機能を有しており、それは心象風景（E.サイード）や文化的記憶（アルヴァックス、アスマン等）をめぐる過去の諸研究が示すように、現実を空間的、時間的文脈の中で意味づける上で大きな役割を担ってきた。「現代的なロシア、ロシア人意識の原点とされる対ナポレオン戦争期に至るまでのロシアにおいて人々はどのように多様なロシア像を思い描き、言語表象として結実させてきたのか」。これが本研究課題の核心をなす問いである。

(4)
研究代表者は「祖国戦争」200 周年であった 2012 年に日本ロシア文学会全国大会において 19-20 世紀のロシア文化における祖国戦争の記憶をテーマとするワークショップを主催した。以後も対ナポレオン戦争期のロシア文化についての研究を続けているが、このことは、このロシア史上未曽有の大事件がロシア人のアイデンティティ形成にきわめて大きな役割を果たしたこと、加えて研究代表者がこれまでに取り組んできた 18 世紀ロシア文学をめぐる研究課題の多くがその問題と深く関わっていることを、改めて認識する契機となった。このようにしてこれまで別個に行っていた研究の成果を一つの問題意識のもとに束ねて発展させることの意義を認識したことが、本研究の着想につながった。

２．研究の目的

本研究は、18 世紀末から 19 世紀初頭のロシアの文芸作品に現れたロシアの形象を、「王朝国家」「歴史的記憶」「空間表象」といった視点を軸として検討し、近代以降のロシア、さらに 18 世紀以降ロシアをその一部として組み込んだヨーロッパ文化に関する総合的な理解に資することを目的とする。またそのことによって、ナポレオン戦争に先立つ近代ロシア文化の形成期においてはロシアのイメージがどのような要素から形作られていたか、それらはロシア文化のアイデンティティとどう結びついたのか、といった点を明らかにすることも目指す。
最終的には、各テクストに現れたロシア像の特徴やその形成過程を検討することを通して、近現代のロシアのナショナル・アイデンティティと強く結びついた「ロシア」のイメージがどう作られ、どう機能したのかという問題を考えるための材料を提供することが見込まれている。

３．研究の方法

(1)
本研究では、18 世紀末-19 世紀初頭のロシアの文学作品に表れたロシアの形象を、王朝国家、歴史的記憶、空間表象といった相互に重なり合う複数の視点を軸として検討した。具体的には、この時代のロシアの様々な文学テクストを分析し、国家としてのロシアのイメージ、ロシアの歴史的過去の想起、ロシアの国土に対する眼差しといった問題を個々のテクストに即して検討した。

(2)
本研究の実行にあたっては文献の収集が大きな鍵となるため、当初の予定では、国内の大学図書館に加え、モスクワやサンクトペテルブルク、ヘルシンキの図書館を利用する予定であったが、新型コロナウィルス感染症の流行とロシアによるウクライナ侵攻が影響し、計画の変更を余儀なくされた。関連文献のうち一定数は入手済みであり、新たにオンラインで入手できた文献も多かったが、最終的には研究期間を 1 年延長し、ヘルシンキ大学とワルシャワ大学の図書館を利用した。いずれもロシアの図書館に比べれば所蔵される資料は限られているため、予想外の資料に出会うことで研究の幅を広げる可能性はかなり制限されたが、それなりの成果を出すことはできたと考えている。

４．研究成果

(1)
本研究の成果の一つとしては、2019 年 12 月に北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センターで行われた冬期国際シンポジウム「帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学」で行った報告「Литературные образы Российской Империи конца XVIII - начала XIX веков（18 世紀末～19 世紀初頭におけるロシア帝国の文学的形象）」がある。この報告ではロシア帝国の威容を表現するにあたり用いられた詩的技法として、地名の列挙と民族名の列挙とを比較し、それぞれに見られるロシア表象の様式についての考察を行った。空間表象とロシア像の関わりを解明する上でこの考察は重要なステップとなった。

(2)
国家としてのロシアの表象および歴史的記憶の問題を考えるにあたり、エカテリーナ二世期の文化状況全般について研究を進めた。2020 年 2 月にはそれまでの研究成果も生かしつつ進めた研究の成果が研究書 Publishing in Tsarist Russia: History of Print Media from Enlightenment to Revolution の中の一章として発表された。ここではエカテリーナ二世期に行われた外国語文献の翻訳出版の促進政策が啓蒙、ヨーロッパ化の手段としてロシア語の鍛錬を目指していたことを明らかにした。この考察は、この時代に国家が進めたロシア像のアピールの性格を考える上で重要な前提となる。さらに、2023 年 10 月に日本ロシア史研究会大会で行った報告「エカテリーナ二世期の言語文化における『ロシア』―ロシア史を題材とするエカテリーナ二世の二つの史劇をめぐって」では、エカテリーナ二世が執筆したロシア史を題材とする戯曲を検討材料とし、そこでルーシ国家の歴史を通したロシア国家像の提示とヨーロッパ化と啓蒙主義の理想が一体となっていたことを示した。このテーマは国内のみならず国外でも専門研究は十分になされているとはいえず、18 世紀ロシア文化の理解に大きな意義を持つと考えられる。

(3)
近代ロシア像の大きな転機である対ナポレオン戦争期のロシア文化についても研究を行い、王朝国家の論理と歴史的記憶がどう関係しあっているかを探った。現時点で対ナポレオン戦争当時から 1830 年代のレールモントフに至るまでのロシア文学を分析対象として研究を続けているが、期間中には成果の発表が間に合わなかった。一方で、ロシアへの渡航が制限されたことにより 2023 年 8 月にワルシャワでの文献調査を行ったが、その結果としてこのテーマにおいてポーランドというファクターを大きく考慮に入れる可能性が生まれた。この点は本研究にとって大きな意義を持つと予想される。

(4)
本研究の問題意識やその過程で得られた知見はいくつかの一般向け著作に反映した。2022 年に刊行された中村唯史他編『ロシア文学からの旅』（ミネルヴァ書房）に寄稿した項目「ロシア詩の黎明」および「境界上のウクライナ」、2023 年に刊行された啓蒙思想の百科事典編集委員会編『啓蒙思想の百科事典』（丸善出版）に寄稿した項目「ロシアの啓蒙」などがそれである。また上記の著作『ナターシャの踊り』の共訳書（2021 年）のために執筆した訳者解説は、同書の主題であるロシア文化とロシア性の問題に関する論点を整理したもので、本研究の問題意識が反映している。こうした出版物を通じ本研究の成果を部分的に社会に還元することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鳥山祐介	４．巻 35
２．論文標題 「被造物を研究することはできない，　故に，創造主は理解し難い」　―ロモノーソフの頌詩「神の偉大さについての夜の瞑想」とエンテュメーマによる作品主題の提示―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SLAVISTIKA	６．最初と最後の頁 297-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080021	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鳥山祐介
２．発表標題 Ｒｕｓｓｋｉｊ ｊａｚｙｋ ｄｌａ ｖｓｅｘ: «ｍｏｄｅｒｎｉｚａｃｉｊａ» ｒｕｓｓｋｏｇｏ ｊａｚｙｋａ ｐｒｉ Ｅｋａｔｅｒｉｎｅ II （万人のためのロシア語： エカテリーナ二世期におけるロシア語の「近代化」）
３．学会等名 シンポジウム「ロシアの近代化過程を考察する」　―ニコライ・ペトルヒンツェフ教授を招聘して（於：明治大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鳥山祐介
２．発表標題 Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｎｙｅ ｏｂｒａｚｙ Ｒｏｓｓｉｊｓｋｏｊ Ｉｍｐｅｒｉｉ ｋｏｎｃａ XVIII - ｎａｃｈａｌａ XIX ｖｅｋｏｖ（18世紀末～19世紀初頭におけるロシア帝国の文学的形象）
３．学会等名 ラブ・ユーラシア研究センター2019 冬期国際シンポジウム（国立研究大学高等経済学院HSE（モスクワ）と共催）「帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学」（於：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鳥山祐介
２．発表標題 ロシアの啓蒙
３．学会等名 日本18世紀学会第45回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 鳥山祐介
２．発表標題 エカテリーナ二世期の言語文化における『ロシア』―ロシア史を題材とするエカテリーナ二世の二つの史劇をめぐって
３．学会等名 日本ロシア史研究会大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計5件

１．著者名 中村唯史、坂庭　淳史、小椋　彩	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 4
３．書名 ロシア文学からの旅	

１．著者名 日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 4
３．書名 啓蒙思想の百科事典	

１．著者名 鳥山　祐介（共訳、訳者解説）	４．発行年 2021年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 14
３．書名 オーランドー・ファイジズ『ナターシャの踊り』（第4，5，7，8章以外の全ての箇所。ページ数は訳者解説のみ）	

１．著者名 鳥山祐介（分担執筆，範囲:「地域・民族・文化①ヨーロッパ・ロシア中部」「18世紀文学」「旅行記」「フリーメイソン」）	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 886
３．書名 ロシア文化事典	

１．著者名 Yusuke Toriyama（分担執筆，範囲:Chapter 1）	４．発行年 2020年
２．出版社 Bloomsbury	５．総ページ数 280
３．書名 Publishing in Tsarist Russia: A History of Print Media from Enlightenment to Revolution	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関